

---

# 表の裏に。

神の息

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

表の裏に。

### 【著者名】

アーネスト

### 【作者名】

神の息

### 【あらすじ】

子供の無邪気で明るい心を無くし、冷めた心しか持っていない中学生男子と、心の中で思っている事を表情に出せない、無口無表情な中学女子の、青春系小説。

## 一話・表 裏（前書き）

主人公が一人で、二人の目線から書いてしているので、読みにくいと思います。

一話・表 裏

内村 ウチムラ 心次郎 シンジロウ 男 中学2年生

一日一日が淡々と過ぎていく。思い出に残るような事も起きず、ただ平凡なだけの日々を歩いていく。

いつも皆は少し何か起これば、笑ったり、泣いたり、怒ったり。俺にはそんな子供っぽい「表現」はできない。俺は冷めた心しか持っていない。いつも皆に合わせて、楽しくも無いのに笑ったり、悲しくも無いのに泣いたり、ムカついても無いのに怒ったり。

それと共に、思っている事を表に出さなかつたりしている。

いつもガマンしている。

だから、人とはあまり話さない。顔を合わせることさえも避けてい る。本当の「気持ち」なんて伝わるわけがない。

どうせ伝えられたとしても、半分ぐらいだろう。

いつも俺はパソコンの中で「気持ち」を伝えようとしている。チャットとか掲示板で見えない誰かと話している。その方が顔

も合わさなくともいいし、ガマンする必要も無くなるから。

今日は自分と同じ年齢の人と話そうとしている。「こんにちわ」の挨拶は済ませた。

さあ 何を話そうかな。

## 一話・表 裏（後書き）

一話ずつが短いので、読みやすい人は読みやすいかと思います。

## 一話・表 裏

北条 豊

女

中学2年生

ふと時計を見ると、いつの間にか今日が終わっていた。

こんな風にい

つも一日は過ぎていった。

私は今、不登校なのだ。

なぜこうなったかというのは、そんなに長い話にはならない。

私は人と話すのが苦手なんです。べつに話題が無いとか、そういう事ではない。

普通の人並みの事をしゃべり、普通の女の子と同じ様な事を考えている。

ただ一つだけ。たつた一つだけ。

私にはできない事がある。

「表情」

いつの日からか、私は笑うことや、泣くこと、怒ることが出来なくなっていた。

心の中では楽しい時も、悲しいときも、ムカつくことだってある。なぜだ

らうか、顔には出せない。

そして今、学校に行かずに、家でパソコンで話している。

これならこの不器用な顔を見られないので済む。

いま、一人の人と話そうとしている。

この

人はどんな人なんだろ？。

一話・表 裏（後書き）

改行が多いですが、その辺はスルーでお願いします。

内村 心次朗

「学校ではどんな事をしてるんだ? (休憩時間とか) 「

俺は話をひろげるために適当に話題を持ち込んだ。返事は

「学校には行つてない」

ということだった。正直びっくりした。俺は続けて話した。

「親は心配しないのか?」

と尋ねた。そりやどんな親だって子供が不登校なのにほつとく様な奴はいないだろ。 ゆっくりと返事がきた。

「親はない」

さすがにこの時はまずい事をきいたな。と思つた。でも俺はそれよりも気になつていていた事があつた。

こいつと話し始めたときから。 「こいつは 俺と 同じ様な事を 抱えて 生きている

顔なんか見なくとも、それは感じられた。不意に俺は口走つた。

「俺は心の冷えきつた男だ。どんな事があつてもあまり具体的にとらえられない。でも、それでも、表情は無理やりつくつてる。お前もきっとそんな部分があるんだろう?だから人が怖いんだろう?」なぜか俺は話していた。長い間返事は返つてこなかつた。流石にいきなりすぎただろうか。

でも俺には分かつた。君は今、涙を流してゐるんだろう。

「私はあなたとは違うけど同じ。」

どういう意味か分からなかつた。続けて、

「私は心で思つたことを表情に出せないんです。」

ときた。俺はなんだか、ちょっとだけ嬉しかつた。俺はまた口走つた。

「お前が笑えないのなら。お前が泣けないのなら。お前が怒れない

のなり。」

「無理でもいいから約束する」

「俺がお前に」

「やつとこつか

「『笑顔』をあげる。」

（後書き）僕・君・謹 謹

謹んでトキコアリじて本当にあつがといひがこます。  
マジであつがといひがこます。  
いさ、マジで。

北条 豊

「学校ではどんな事をしてるんだ? (休憩時間とか)」「学校なんて何年間いつてないだろ?」すぐには返事をした。

「学校には行つてない」

きつと少し程驚いてるんだろうな。とか思つた。

「親は心配しないのか?」

どんどんと質問をしてくる人だなあ。でも残念だけど、私には親なんていないよ。自己紹介では言つてなかつたけど、私は親を幼い頃になくしてゐる。ちょっと返事をするのに戸惑つた。

「親はいない」

流石に話しつぶししゃつたかな。と思つた。だけど私はそんな事より気にかかつてゐる事があつた。

この人と話しか始めたときから。この人は 私と 同じ様な

重荷を 背負つて 生きいてる

目の前にいなくつたつて、それは遠くから伝わつてきた。

「俺は心の冷えきつた男だ。どんな事があつてもあまり具体的にとらえられない。でも、それでも、表情は無理やりつくつてゐる。お前もきっとそんな部分があるんだろう? だから人が怖いんだろ?」

いきなりだつた。びっくりした。それと、すぐ嬉しくなつた。いつの間にか私の瞳からは、

涙が流れていった。変わらない表情をする顔の頬をつたつていつた。変な気持ちで返事をした。

「私はあなたとは違うけど同じ。」

いそいでうつたから、説明不足かなあ と思って急いで続けた。

「私は心で思つたことを表情に出せないんです。」

私は正直に話した。初めてこのことを人に話した。

あなたは私の心にこなれるように返事をくれた。

「お前が笑えないのなら。お前が泣けないのなら。お前が怒れないのなら。」

「無理でもいいから約束する」

「俺がお前に」

「きつといつか」

「『笑顔』をあげる。」

## 四話・表く裏（後書き）

読んでくれて、ありがとうございます！  
・・・面白くないですね、すいません。  
ぜひ感想お願いします！！

内村 心次郎

結局その後は話が弾まことに解散となつた。 就眠。

午前七時、俺はむつくりとベッドから出た。 俺には高校2年生になる姉貴がいる。 名前は華子<sup>ハナコ</sup>。

俺と華子は別々の部屋が家の二階にあるわけだが、華子はなかなか自分で起きられないから、俺が起こしに行く。

「うーー、起きろー。朝だぞー。起きねーと田の周辺にいつもより辛めのワサビぬんぞー。」

「ん、あーー、うーーー。」

なかなか起きやしない。 しおがないから顔をはたいて起こす。

「いい加減起きねーと俺まで遅刻すんだよー。」

「うあーーー、もうちょいだけえー寝かせてー。」

しおうもないやり取りをしてると母さんが部屋に入ってきた。

「まあーーなんてことしてるのーーいくら華子がかわいいからって、手えだしちゃダメよーーー！」

「も、いいからさっさと母さんは朝飯用意しとけよ。」

「はーはーーー！」

母さんはそういうと一階へ降りていった。 するといきなりガバッと華子が起きた。

「今何時！－ヤバイヤバイ！－遅刻するうーーー。」

そう言いながら一階へ降りていった。

その後俺は学校に行く用意をして、荷物を持ち、家を出た。やたらと友達としゃべりながら学校に向かっていく奴らが今日も早足で俺の隣を追い抜かしていく。

芸人の話とかしながら楽しそうに笑っている。 あんな芸の何が面

白いのだろうか。

そんなしようもない会話で笑えるあんたらが恐ろしい。

「あらウッチー。今日も寂しく一人で」登校ですか。」

「ああそうだ。後、ウッチーはやめろ。」

話しかけてきたのは同じクラスの仲のいい女子、紺野緋伊奈。<sup>コンノヒナ</sup>メガネをかけている普通の女子。

「そういう緋伊奈も一人だろが。」

「まあねー。そういうえば今田はお弁当持つてきてないんだった。ちょっとジロー、コンビニできてよ。」

「別にいいが、ジローもやめる。」

とこいつで通学路の途中にあるコンビニで寄ること。

「どのパンがおいしかなー。」

と緋伊奈はパンをじろじろと見てくる。緋伊奈の隣にもう一人、

うちの学校の制服を着た女子がいた。

髪は短いショートヘアで、肌は色白くて、世間でいう所の美人さんだ。しかしこんな奴見たことが無い。

「おい、緋伊奈。」

「なによ。」

「あそこに居る女子、知ってるか?」

「知らないわよ。誰かしら?」

なんてことを話していると、学校のチャイムが聴こえた。すると

その女子はいそいそとパンを買い、学校へ走つていった。たつたと駆けていくその後姿を見たとき、なにかを感じた。

昨日と同じ感じの。あの優しい温もりを。

「ちょっと！なにボーッと突つ立つてんのよ。急ぐわよ！」

そういうと緋伊奈は学校に向かつていった。Let, s 遅刻。

遅刻して怒られた後、朝のホームルームがあつた。まあいつも話は聞いてないのだが。

俺の席は窓際のほうの、後ろの方の席。先生の話を聞いたとたん、妙に皆、ざわつきはじめた。

どうせ、スゴロク大会がありますとかそんな話で盛り上がりってるんだろう。

と思いつつも先生の話に耳をたてた。

「今日は不登校だった生徒が来ています。みんな知らないと思つけど、仲良くしてあげてください。」

だといふことらしい。まさか昨日の・・・。なんて漫画みたいな話あるわけないか。

また俺は横を向き、話を聞くのをやめた。

「ガラガラ」

と扉の開く音がする。その時また俺は何かを感じた。朝と同じ・・・。

ふと前を見ると、今朝に見た美人さんが立っていた。

「北条豊です。よろしく。」

彼女は小声で、顔をうつむせながら言った。

## 五話・君+僕（後書き）

なんかいきなりトントン拍子です。展開はやくて分かりにくいかも  
しませんね。  
感想してくれると、嬉しいです。

北条 豊

その後は解散した。 睡眠。

朝、私は目覚まし時計の設定時間の10分前に起きた。 今は6時30分。

いつもはこんな早く起きないけど、今日は早めに起きた。 理由は一つ。

約3年ぶりに、学校に行くことを決めたから。

親はいないから、朝ご飯は自分でつくる。 ご飯を食べ終わるともう時間は無い。

お昼ごはん代をお財布に入れて、いそいで家をでた。

「いつてきます。」

誰もいない家の、誰もいない玄関に3年ぶりにこの言葉を響かせた。学校に向かう道には見たことのない人達がたくさんいた。 少しあどおどしながら私はかばんを肩にかけ歩いた。

皆、集団になつて登校している。 笑つたり、怒つたりしながら。正直、羨ましかった。 後ろから、

「遅刻するうーーー！ 心次郎！ いつてきまーす！」

と、女人の声が聞こえた。 高校生ぐらいかな。 私もあんな活発（？）な人になりたい。

少し後に、『内村』と書いた名札をつけた男子が歩いてきた。 一人で。

その時、何かに気付いた気がした。 昨日と同じ温もりが伝わってきた。

歩いていくと、コンビニがあった。 今日はここでパンでも買っていいこう。

棚にはいっぱい、ビニール袋に入ったパンが並んでいた。

どれを買つか迷つていると、さつきの内村クンが入ってきた。隣には友達っぽい女の子がいた。

女の子が私の隣でパンを選んでいるのを見ていた。

やつぱり温もりを感じた。もしかしたら本当に昨日の・・・なんて事あるわけがない。

そんな事を考えていると、学校のチャイムがなつた。

私は適当に選んだパンを急いで買って、学校に走つた。

結局、遅刻はしたけど、別に怒られはしなかつた。不登校女子が来たのにそんな事気にしてる場合な人なんていなかつた。

ホームルームなる行事で紹介してくれるそうだ。

少しざわつく部屋に、私は勇気を振り絞つて足を踏み込んだ。

「ガラガラ」

ドアの開く音と共に、すぐに気付いた。窓際のほうの、後ろの方の席。内村クンがいた。

またどどいた温もり。私は恥ずかしいから、うつむきかげんでしゃべつた。

「北条豊です。よろしく。」

温もりの持ち主はそつと、私の方を向いた。

六話・私+彼（後書き）

六話投稿です！！（チルチョコを食べながら）  
感想くれると嬉しいです！！

「じゃあ、端っこの方の空いてる席あるでしょ？そこ座つて。」

担任の一言に小さく頷き、そいつは俺の方に歩いてきた。

空いてる席は、見事なことに俺の隣だけだ。

『まさか本当に昨日のあいつか？』

いつもならそんなこと考えたりするような事など無いのだが、俺が思つには間違いない。

北条は昨日のあいつだ。

ホームルームの後は休憩時間だ。北条にじりやつて話しかけようか考へてるど、北条が腕を少しだけ伸ばし、俺の制服をくいぐいと引っ張つてきた。

「……………昨日はありがと。」

突然言われたもんだったからびっくりした。まさか北条から話しかけてくるとは思つてなかつたし。

「えーーーと……………なんて呼んだらいい？」

とりあえず話を変えようと思つて言つてみた。

「……………コタカ。」

いきなり下の名で呼べと。でも俺はそれを受け入れた。

「じゃあさ、豊。昨日の約束、覚えてるよな？」

「うん」

「だつたらこれで約束、守れそつだな。」

「……………なんで？」

「そりやあ同じクラスだつたら、ほぼ毎日会えるんだから。一回ずつ、表情作つていこい。」

無理なら一ヶ月でもいい。ぜつてーに約束は守るからな。」

言つた後に、こんな綺麗事信じてくれねえよなつて思つた。でも豊は、少しだけ頬を赤らめながら、

「……………ありがとう、心次郎クン。」

と語り始めた。いきなり下の名で呼ばれたもんだったから、ちょっと照れくさくて、田線をそらすように俺は窓の外に眼をやつた。またすぐに豊の方を見ると、まだ頬を少し赤らめながら、教科書やらを机の中から出していいる。

まったく変わらない表情かおだつたけど、俺には笑顔に見えた気がした。

## 六話・話　君（後書き）

久しぶりに投稿でっす！！

この小説イイ！と思つてくださつた読者様は、地球儀の端っこにパンチをしましょ。ぐるぐる回ります（当たり前田のクラッカ

।

「じゃあ、端っこの方の空いてる席あるでしょ？そこ座つて。」

先生の言葉に小さく頷いてから、私は空いている席の方へ向かつた。隣の席は見事な事に内村クンだった。

何の根拠も無いけど、私は内村クンは昨日のあの人だ。と決め付けていた。

いや、絶対だ。

先生が少し話した後、ホームルームが終わり、休憩時間になつた。内村クンがすぐに話しかけてくると思って待つて待つていたけど、ずっと考え込む様な表情で窓の方を見ていて、私はじれつたくてしうがなかつた。

くいくい。と内村クンの制服を引っ張つた。それに気付いて内村クンが振り返つた。

「…………昨日はありがとう。」

あんまり何も考えずに振り向かせたから、一言しか言葉が出なかつた。

「えーーーと……なんて呼んだらしい？」

その場を濁すように聞いてきた。正直、こっちも少し助かつた。

「…………ユタカ。」

いきなり下の名前は嫌かなあとは少し思つたけど、内村クンは小さく頷いた。

「じゃあさ、豊。昨日の約束、覚えてるよな？」

「うん」

「だつたらこれで約束、守れそつだな。」

「…………なんで？」

「そりやあ同じクラスだつたら、ほほ毎日会えるんだから。一日ずつ、表情作つていこつ。

無理なら一ヶ月でもいい。ぜつてーに約束は守るからな。」

そう言つた後、少し恥ずかしそうにした内村クンの表情がかわいらしかつた。

その言葉がすごく嬉しかつた。

そういう自分も、すごく恥ずかしくつて、頬が火照つていた。

「・・・・ありがとう、心次郎クン。」

思わず下の名前で言つてしまつた。照れくさそうに田線をそらした

心次郎クンは、カッコよかつた。

火照つた顔が直らないけど、表情は変えられなかつた。

でも、心一郎クンの心は、温もりを取り戻していくと思つ。

## 八話・私 彼（後書き）

ロニアオとジユリーハットはオレンジ色の糸で結ばれています。

こんにちは。神の息（溜め息）です。

読んでくれてありがとうございます。感想を頼むぜ・・・。

眠たい事この上ない授業が全て終わり、やっと開放された。今は、春休みが明けてまだあまり経っていないので、一週間は昼までの授業だ。

「・・・今日は集会があるんだつたつけな。」

思い出し、憂鬱になつた。まあ、そうじゃなければパンなんか買う必要も無かつたわけだが。

「先、行つてるわよ！絶対さぼんじゃないわよー。」

緋伊奈がたつたと走つていく。緋伊奈は学級委員なので忙しいのだ。体がだるい俺は、教室の鍵を閉める仕事をもらい、最後まで教室に残ることにした。

少しすると皆、居なくなつてた。が、隣にはまだ豊がいた。

「・・・行かなくていいの？」

「別にいいんだよ、こんぐら。今日の集会は校長の一学期の注意と先生が帰つた後にやる、ライブくらいのもんだからな。」

「・・・ライブ？」

「そ。ライブ。別にプロのミュージシャンが来るわけでもなく、普通に学生がやるだけのライブ。」

「・・・それつて先生達は知つてるの？」

「多分。本当は止めなきやいけないんだろうけど、なんせ人気あるからな。だいたい3グループぐらい出てくるんだけど、そん中にもの凄い人気のあるグループがあつてな。バンドのグループなんだけど、名前は確か、「フナフティ」だつたな。」

「どういう意味？」

「緋伊奈が地球儀回して見つけた地名だつてよ。」

「緋伊奈ちゃんもバンドやつてるの？」

「うん。ギターやってる。あと、ヴォーカルもつむのクラスだつたぜ。」

「・・・誰？」

「元原富士夫<sup>もとはら ふじお</sup>つてやつ。最近はテレビの声優とかまでやつてゐらし  
いぜ。」

がた。と豊のイスから少しだけ音がして、いざ、立とうと立つ様な  
体勢になつて、無表情のままの顔を俺の方に向けてきた。ワクワ  
クしてゐるのか、すこし腕とかがムズムズ動いていた。

「・・・見に行くか。」

俺が一言呟つと、少し大きめに「クリと頷いて、がたつと立ち上が  
つた。

机の横に引っ掛けであるカバンを持つて、俺と豊は体育館に歩いて  
いった。

「・・・やっぱパン食つてから行く？」

と俺が聞くと、今度は首を横に振つた。そのしぐさを見て、思わ  
ず笑顔がこぼれてしまつた。豊も笑つた。・・・ような気がし  
ただけだつた。

## 九話・君 僕（後書き）

最近忙しくて死にそう・・・なんて弱気な発言はまったくしてませんよ！－本当ですよ！－うん・・・はい・・・忙しくて死にそです。

こんな僕に感想を送つてくれると、僕の元気も100倍！－いや1000倍！－になりますので感想バンバン送つてください！－では、十話お楽しみに！。

久しぶりの授業に少し疲れが溜まってしまった。今は正午。朝、先生に教えてもらつたのだが、昼までの授業らしい。

「集会……。」

黒板を見ると端に書いてあつた。どうすれば良いのか分からぬまま、体育館に行く人達をボーッと見ていた。朝に見た女の子がたたた一つと走つていつた。

皆、少し急いでるような様子なのに、心次郎クンだけずっと座つていた。

結局、二人だけになつた。

「……行かなくていいの？」

どうしても気になつた。

「別にいいんだよ、こんぐらい。今日の集会は校長の一学期の注意と先生が帰つた後にやる、ライブくらいのもんだからな。」

「……ライブ？」

あまり中学校では聞かない話だ。

「そ。ライブ。別にプロのミュージシャンが来るわけでもなく、普通に学生がやるだけのライブ。」

「……それつて先生達は知つてるの？」

「多分。本当は止めなきやいけないんだろうけど、なんせ人気あるからな。だいたい3グループぐらい出てくるんだけど、そん中にもの凄い人気のあるグループがあつてな。バンドのグループなんだけど、名前は確か、「フナフティ」だつたな。」

「どういう意味？」

「緋伊奈が地球儀回して見つけた地名だつてよ。」

「緋伊奈ちゃんもバンドやつてるの？」

「うん。ギターやってる。あと、ヴォーカルもつちのクラスだつたぜ。」

「・・・誰？」

「元原富士夫ってやつ。最近はテレビの声優とかまでやつてるらしいぞ。」

私はどうしてもライブが見たくなり、席から立ち上がりそうになつた。

でも私は、素直に「行きたい」なんて言えるような人では無い。心次郎クンの方をじつと見て、「行こう」と言わんばかりの目線を送つた。

「・・・見に行くか。」

私はすぐにコクリと頷いて、立ち上がつた。

机の横に引っ掛けたるカバンを持って、私と心次郎クンは体育館に歩いていった。

「・・・やっぱパン食つてから行く？」

少し意地悪な質問に、私は首を横に振つた。すると心次郎くんはそれを見て、クスリと笑つた。あつたかい笑顔だった。

十話・問 彼（後書き）

やつと十話です！！ どうでもいい話ですが、読者数を確認した所、二話が一番多かったです。あと、話しが進むにつれて、読者数が減つていつたりしてる訳ですが、なぜか六話が人気高いです。どうやら豊の方が人気高いっぽい。それと、毎度毎度読んで下さってるかた方、本当にありがとうございます！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7300d/>

---

表の裏に。

2011年1月25日14時25分発行